View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

本間一夫の生涯と事業

室田保夫

はじめに

二〇〇三（平成一五）年八月一日、本間一夫という一人のキリスト教社会事業家が他界した。幼い時に視覚障害者となったが、その逆境に屈せず、視覚障害者のための図書館、「点字図書館」を創設した人物である。我が国の障害者福祉の歴史、とりわけ盲人福祉の歴史において重要な人物であることはいうまでもないが、これまで本格的に研究の対象とされてこなかった。おそらく彼の最大の業績である点字図書館が特殊な図書館であり、そのことが大きな要因であろう。しかし彼の歩んだ足跡は福祉の分野のみならず、日本の近現代史という分野においても注目されていく必要があろう。そして障害者、とりわけ「盲人」という存在の研究は歴史的な課題として、今後、追究されていかなければならない。[1] この小論は本間の主要著書、論文を参考にしながら、表題の研究のための一里塚的なものである。

ところで本間自身が著わした単著としては、これまで、『指と耳で読む―日本点字図書館と私』

（岩波書店、一九八〇）、『点字あればこそ―出会いと感謝と』（善本社、一九九七）、『我が人生「日本点字図書館」』（日本図書センター、二〇〇一）の三冊があるが、いずれも自伝、若しくは自伝的な著作である。そして共著『欧米の盲人福祉をたづねて―世界盲人福祉会議と欧米の盲人施設―』（日本点字図書館、一九六五）、共編『点字と朗読への招待』（福村出版、一九八三）、共編『点字と朗読を学ぼう』（福村出版、一九九一）、編著『点訳のしおり』（日本点字図書館、二〇〇二）等の著作がある。一方、個別論文（墨字）はそれほど多く書いていない。彼の執筆が点字であるということで、もちろん筆者が渉猟したのは墨字化されたもののみであり、点字論文については調査が行き届いていない。また、本間の生涯を論じた著作としては池田澄子『愛の点字図書館長―全盲をのりこえて日本点字図書館を作った本間一夫』（偕成社、一九九四）や古澤敏雄による伝記『本間一夫　この人、その時代』（善本社、一九九七）が出版されている。そして個別、彼の生涯に触れている著書や論文もあるが、それほど多くはない状況である。[2]

そもそも点字（六点点字）は一八二五年に、パリ訓盲院の生徒であったフランス人、ルイ・ブライユ（一八〇九―一八五二）によって発案されたもので、一九世紀のことで、比較的新しいことである。[3]このブライユの点字発明が世界の視覚障害者にとって福音をもたらし、各国に広がっていった。日本でも幕末から明治初期にかけてこの点字が紹介されてきたが、一八九〇年、東京盲唖学校の教員であった石川倉次（一八五九―一九四四）らによって日本に本格的に導入されたのは一九世紀末のことである。いわばこの時代から「わが国の点字の歴史が始まった」[4]と言える。そしてこの点字をもとにして、大正期から小規模ながら各地の図書館や個人の家において、点字図書が置かれることになるが、それらは二〇〇～三〇〇冊程度のもので内容も限られていた。

かかる中で本間一夫が一九四〇（昭和一五）年一一月、東京において七〇〇冊の点字本をもって「日本盲人図書館」の看板を上げてスタートさせたのである。本間の場合は先進国並みの本格的な点字図書館を目指したものであった。戦後、この図書館は「日本点字図書館」と改称され、今では点字図書館蔵書の数は約八万、それ以外、録音図書・録音雑誌、あるいは映画のＤＶＤ等も置かれ、レファレンスサービスも充実し、内外の視覚障害者によって利用されている。四〇年に産声を上げた小さな図書館は日本での最大規模の点字図書館に発展し、視覚に障害のある人々にとって生活に欠かせない存在となっている。もちろん本間を支え、協力した多くの人々を忘れることは出来ないが、彼が青年時代に抱いた日本に本格的な点字図書館創設をという夢は達成されたと称してよかろう。こうした点からこの本間の事業は日本の点字図書館の歴史から画期的な意味をもっていたのである。

既述したように、この小論は本間について、彼の生涯を主に辿ったものであり、本間研究の基礎的な研究への足掛かりを意図したものである。彼の自伝的な著書や論文、渉猟した関連資料を中心に、小生なりの本間像を構築したものである。

一、本間の少年時代―北海道増毛、失明、そして上京

本間一夫は一九一五（大正四）年一〇月七日、北海道の増毛（増毛郡増毛町）に生を享けた。[5] 祖父本間泰蔵は一八五〇（嘉永三）年、佐渡にて生まれた。[6] 七三（明治六）年、二三歳の時、北海道の小樽に渡った。佐渡から北海道小樽に渡る経緯については詳らかではないけれども、北海

道という新しい土地を求めて、一攫千金を求めての渡道であったと考えられる。明治維新時、小樽は函館とともに玄関口でもあったし、江戸時代に佐渡から北海道へいたる日本海沿いの海路（北前船）が開かれていた。

泰蔵はこの小樽の地で呉服商の店員となる。しかし、働いていた店が閉じられることとなり、行商の旅に出、その落ち着いたところが増毛であった。泰蔵が増毛を選んだ理由は行商でしばしばこの地を訪れており、商いにおいて独特の勘が働いたのかもしれない。また増毛は鰊の漁場として盛んな所であった。ここで呉服業「丸一本間」を開き、一八八三（明治一六）年には荒物業を、その後は酒造業を開始している。

酒は創業時から二〇年間、本間家の敷地内にある醸造蔵で作られた。また、鰊の豊漁による好景気が続き、泰蔵はその網元にもなり、成功を収めた。また鰊の景気を背景に酒の需要が増え続け、創業時の設備では量産できないところから、一九〇二年、現在地に地元産の軟石を使った酒蔵を建設する。ちなみに創業一〇〇年を記念して、二〇〇一（平成一三）年に国稀酒造株式会社と社名を改めている。

さて、泰蔵はチエと結婚し、三人の子供を授かった。長男泰輔、二男泰一、長女千代である。長男泰輔は一八八五年生まれであり、家業を継いでいたが、四三歳の若さで亡くなった。二男の泰一は九四年生まれである。父や長兄の死後、彼が本間家の家業を継いでいる。千代は内山述作と結婚した。内山は小樽の名望家金子元三郎の下で働いていた人物であり、かくて二人の間に一夫が生まれたのである。しかし母千代は一夫の出産後、結核に罹病し、茅ヶ崎南湖院に入院していたが、翌年一二月に亡くなる。そして、父述作もその病気が元で離縁され実家に帰されること

になり、一夫は子供のなかった伯父夫婦（泰輔・キミ）に育てられることになるのである。幼い時に引き取られた故、そして伯父夫婦も実子の如く育て、本間は大人になるまでその事実を知らされずにいたこともあり、「たいへん幸せな境遇の中で幼児期をすごし」[7]成長していった。

しかし不幸が突然、一夫に襲い掛かる。一九二〇（大正九）年一二月、五歳の時に脳膜炎に罹り失明し、小樽の鎌倉病院に入院する。翌年四月、さらに良い治療を求めて上京することになる。東京での生活は二年に及び、東京帝国大学の眼科医ら著名な医に診断を受けることになる。しかしそうした努力のかいもなく回復しなかった。こうした彼の病魔に襲われてからの治療への様子をみていると恵まれた環境であったことは容易に推察されるが、治療努力は報われず、関東大震災の五カ月前の二三年四月、失意のもと故郷増毛に帰る。家族は帰郷してからも、藁をもつかむ心境でいろいろと試みさせたが、遂に万策尽きる。しかし本間少年は失望しながらも明るく自由奔放に生きていた。当時の彼の生活の一端を彼の回顧からみておこう。

また私は、そのころ海にもたいへん親しむようになりました。増毛という町は、四筋の町並み中心に長く海岸に沿っているのですが、私の家はその中ほど、海岸の波打際からほんの四、五十メートルの所にあります。ですから、朝な夕な、波の音をきいて育ちました。単に水につかって泳ぐということだけでなく、足先で石の間をさぐり、ウニの類を見つけてさっと水底にくぐって、つかみ上げる。ウニのトゲの感触や、ばあやに手を引かれて川水の流れこむあたりに集るユゴイの群れに、釣竿をのばしつり上げる瞬間のスリルなどは、実に充実した喜びでありました。[8]

ここからは本間の少年らしい生活が垣間見え、何かしらの安堵の気持ちを覚える。本間は地域

の学校は行けなかったが、多くの本を読んでもらいながら、知識を増やしていった。しかし、友達が昼間、学校に行っており、彼には一人で過ごす寂しさが当然存在した。かくした生活が数年経っていったが、中途半端な人生行路、先の見えないもどかしさの中で、家族だけでなく本間自身にも学校教育への憧憬もあり、未来を見据え障害を受け入れて新しく道を切り拓いていかねばならないことは必定であった。そうした時、一九二七年には本間家を興した祖父が死亡し、翌二八年には養父泰輔も他界する。そして本間の残された道は歳は少し取って遅れていたとはいえ盲学校への進学以外、選択の余地はなかった。

二、函館盲唖院時代

（一）函館盲唖院へ入学

本間は一九二九（昭和四）年春に函館盲唖院に入学する。年齢にすれば一三歳のことであり、裕福な家庭環境であったが故に、就学の時期が遅れたと言える。当時、北海道には札幌、小樽、旭川、函館の四カ所に盲学校があったが、どれも増毛から通う距離ではなかった。そこで一番遠いが、歴史のある函館の盲唖学校に進学することとなる。[9] というのは泰輔の妻キミは函館の近郊から本間家に嫁いでおり、母方の伯父一家が学校の近くに住むことになって、そこから通学するということになった。当初、彼は三年生に編入したが、その年の二学期には五年生となり、二年間で初等部を終えた。増毛時代、学校に行かなかったが、多くの本を読み、充分な学力はついており、彼の力を見越しての進級であったのだろう。したがって本間は二九年から三五年卒業まで

の六年と、その後関西学院入学の準備に一年と合計七年間をこの函館にて過ごすことになる。

ところで函館盲唖院は一八九五（明治二八）年一〇月、米国婦人シャーロッテ・ピンクニー・ドレーパー（Charlotte Pinckney Draper）が市内青柳町一五二番地に教場を設置し、それを「函館訓盲会」と称したのが、その創始とされている。[10] この盲唖院は一九〇一年に函館訓盲院と改称され、ワドマン女史が院長に就いた。一九〇二年に「唖部」が設置され、明治末期に私立函館盲唖院と改称されている。しかし一四年の函館大火のために焼失し、後に市内汐見町四七番地に移転し、「盲学校及聾唖学校令」（二三年）で二四年に学校として認可されている。そして二五年五月に財団法人函館盲唖院の設置が認可された。学校は函館山の麓の風光明媚な函館市元町に移転している。したがって本間が入学した当時は元町の財団法人函館盲唖院時代である。時の院長は後述する佐藤政次郎（在寛）であった。

さて、この盲唖院でさしあたり、学んでいかねばならないことは点字の修得である。点字を習ったのは荒木榛一という教師であった。本間はここで点字を修得し多くの本や雑誌を読むことが可能となった。また琵琶の稽古を始めている。二年（通常六年）で初等部を終え、四年間の中等部に進むことになる。

ちなみに本間が初等部六年の時の学芸会の時の様子が当時の『函館新聞』に「泪ぐましい盲唖生の学芸会」という表題で掲載されている。そこには「函館盲唖院第五回新築記念学芸会並に展覧会は十七、十八両日に亘り午後一時より催した定刻職員生徒及び来賓一同修礼の後記念日の歌を合唱佐藤院長の挨拶ありて直に学芸に移る先づ第一番に盲初等部六年本間一夫君のハーモニカ独奏（一、砂漠を過ぎ行く商隊　二、藁の中の七面鳥）に器用な吹奏に聴者を感ぜしめ」[11]云々と

報じられている。当時の本間の様子（一五歳）が伝わってくる貴重な記事である。

さて本間は一九三一年四月から中等部に進むことになる。一五歳となっており、ここで卒業するまで四年間学ぶことになる。中等部に進んだ後も、三二年、北海道弁論大会で二位を取る。演題は「明日の希望に生きよ」であった。さらに三三年、東北・北海道弁論大会で「聞け黎明に高鳴る響きよ」という演題で一位を取る。[12]

また中等部には『学海』という回覧雑誌があり、本間は一、二年の時からその編集が任されていた。卒業まで毎月、何かを書いていたと回顧している。このように、中等部において、弁論や雑誌の編集、執筆といった活動をしている。そうした才能は彼の恵まれた環境における多くの読書経験によって育まれたものと思われる。

さらに特筆すべきは院長佐藤在寛という人物から多くの薫陶感化を受けたことである。本間は「院長は佐藤在寛先生という方でした。この先生については、どうしても語らなければなりません。先生は若い日に同志社（ママ）に学んだことのある、無教会主義の気骨あふれたクリスチャンであり、また函館市内でも知られた漢学者でもありました。町の真面目な青年たちが先生を慕って集り、木曜会、土曜会などという会をつくっていました。私も函館の七年間特別に可愛がられ、薫陶をうけ、大きな影響をうけた忘れられない大恩人です」[13]と述懐している。

人は往々に少年時代に人生の師と呼べる人物と出会い、その人の大きな感化を受けることによって、成長していくものであるが、まさにこの佐藤校長との出会いは本間の人生にとって掛け替えのないものであった。それは偶然的な人生の邂逅ではあるが、その偶然性は後日、大きな仕事をしたとき、その出会いが意味づけられてくる。次にこの佐藤在寛という人物について若干み

ておくことにしよう。

（二）佐藤在寛について

佐藤在寛こと佐藤政三郎は一八七六（明治九）年、徳島県に生まれている。[14] 家業は焼酎の製造販売をしていた。九三年、師範学校に入学する。九七年三月、師範学校を卒業し小学校の訓導となった。その後小学校訓導を退職し、東上して哲学館（東洋大学の前身）で学んでいる。苦学の中で哲学館で学びながら、倫理学や心理学、教育学、倫理学等の著書の編集をする仕事を手伝っている。学校では東洋哲学や西洋哲学、宗教を学び勉学に勤しんだ。

一九〇一年三月、哲学館を卒業し、翌三五年、二五歳の時、教育雑誌『実践教育指針』を発行している。当時、同志と共に小さな修善団体を作り、聖書の研究をしたりして生きる道を希求していた。そして佐藤の人生の師とも称せる新井奥邃と邂逅することになる。[15] また一九〇五年四月、友人と共に上野に「鶯渓女学校」（五年制）を創設する。しかし一五年に学校の教育方針と齟齬を来し退職する。そして新井と縁の深い北海道函館にわたり新しく生きようと決断した。「新井先生がニコライ師に教えを受けたという縁故の地函館が、自己の社会奉仕に没頭すべき聖地と感じて、一〇月二三日函館桟橋にその第一歩を印した」。[16] この時、新井が彼に与えた名前が「在寛」である。[17]

函館では教育職に就いたあと、函館毎日新聞社に入社する。「彦左」のペンネームで教育時評等を書いて教育界にも大きな影響を与えた。かくて函館教育会長かつ盲唖院後援会々長の斉藤與一郎（後の函館市長）が、佐藤に盲唖院長就任を懇請し、一九二二年、ここに就任することにな

る。佐藤は就任にあたって「経済的院の確立」、「盲聾唖教育の権威の確立」、「校風の確立」という三つの方針をたてた。二五年一〇月、校舎を汐見町から元町の公会堂に隣接する場所に新築移転させた。この時創立三〇年の記念式典も行なわれている。このような経歴を持つ人物と本間は接することになる。佐藤の謦咳に触れながら、彼は人間的にも、あるいは人生の指針とも言うべき生き方を暗黙の裡に教えられたことは想像に難くない。後年、関西学院に入ってキリスト教の洗礼を受けるが、佐藤からキリスト教のことを聞き、それが伏線になっていたと思われる。したがって本間のキリスト教観には、新井奥邃の影響を受けた佐藤の思想が陰に陽に影響を受けていると思われる。

(三) 卒業と進路

ところで本間は盲唖院を卒業した後、いかなる道に進むか悩んでいた時、二人の人物との出会いが彼の心に影響を与えた。すなわち岩橋武夫と熊谷鉄太郎との出会いであるが、これもキリスト教という繋がりで理解できる。

岩橋武夫との出会いは、一九三三年三月のことである。彼は函館の組合教会で二晩講演している。当時岩橋は賀川豊彦の「神の国運動」に参加し、各地で講演していた。函館での「その講演は、『光は闇より』と題し、ご自分の失明苦から起ち上った深刻な体験を語られたのですが、ちょうど郷里から函館に出て来ていた母につれられて、一晩だけその講演をきくことができ、大きな感動が与えられました。……略……盲人の中にもこんな立派な方がいる、そんな世界があったのかと、ただただ驚き羨望の思いにかられた」[18]と本間は述懐している。

また本間は一九三四年の熊谷との初めての出会いを「まだ学生のころ、函館のメソジスト教会に伝道に来られたときでした。盲人の仕事は按摩・はり・きゅうだと思いこんでいた私にとって、その前年の岩橋武夫との出会いとともに、まったく新しい世界への開眼でした。またその翌日、わざわざ盲学校に来られ、自身の苦闘を淡々と語られたのを聞いて、〈努力さえすれば〉という自分自身の可能性をも発見できたのでした」[19]と回顧している。

かくして岩橋と熊谷の講演を聴き、「新しい世界を知らされた私は、さらに好本督先生の著書によってライフ・ワークへの扉に手を触れることになる」[20]と回顧している。盲学校時代に本間の心に残った名著との出会いも重要である。それは内村鑑三の『後世への最大遺物』や岩橋武夫の『光は闇より』であり、また好本督の『日英の盲人』によってイギリスが当時、如何に盲人のための施設、たとえば点字図書館が充実し、日本との差が歴然であることを教えられることになる。したがって、将来の構想として欧米に倣って盲人のための施設を発達させるためにはやはり英語を習得しなければならないという欲求に駆られたのは自然である。当時その思いを受け入れてくれる高等教育機関は関西学院であった。迷った挙句、その夢の実現に奔走していったのである。

ともあれ一九三五年三月に無事、優秀な成績で卒業することが出来、六年間、無欠席であったことから、卒業時に金三円の褒美を受けている。[21]そしてそのお金で宮城道雄（一八九四―一九五六）の『雨の念仏』を購入する。この『雨の念仏』は宮城の心に止めた随筆集である。周知のように宮城道雄は七歳で失明したが、我が国の箏曲の領域において名を成した人物である。宮城のように自立し、芸術人としても独立した生き方が彼の内心で共鳴したのだろう。彼にはこうした成功者に対する憧れ、一つのことに集中する生き方に自己の未来の人生を託していたと思

われる。

そして一年間、盲唖院は本間のために研究科を設けて在籍させ、本間は英語の勉強やタイプライターの練習をし関学への入学準備をする。そして一九三六年三月、上阪する。行く道中横浜で大村善永に会い、関学への予備知識を得ている。[22]そして大阪着後、最初に会ったのが『点字毎日』の中村京太郎である。

昭和十一年の三月、私は関西学院受験のため、初めて函館から関西へ出ていったのですが、そのときまっ先に訪ねたのが中村でした。当時、井戸から飛び出したカエルのような私は、不安でたまらなかったものです。しかし点字毎日のロビーでテーブルをはさんで向かい合うと、中村は私の話を聞きながら軽くテーブルを叩いて、「そう、ああそう」と受け止めてくれます。そのもの静かな落ち着いた対応ぶりは私を深く感動させ、「なんでも話せる、頼りにさせてもらえる」と思わせたものでした。[23]

このようにして、函館から本間は関西の地を踏み、次章でみるように、本間が憧れた関西学院専門部の英文科で学ぶことになるのである。

三、関西学院時代

（一）関西学院

既述したように、函館時代に本間は熊谷や岩橋の講演を聞き、新しい世界、新しい生き方に希望を見出し、二人の母校でもある関西学院への入学を熱望し、そして実現させた。「盲学生が全

部で三十人という小さな函館盲唖院から、盲教育とは何のかかわりもない天下に名だたる関西学院を志すということは、文字通り井の中の蛙が大海を望むにも等しいことでした。これこそ一大決心が必要だったわけです」[24]と当時の決断、覚悟を吐露している。まず最初の関門は入学試験であったが、それは面接が中心であり、無事、一九三六年四月、関西学院専門部の文学部英文科に入学する。[25]しかし関西学院の学籍簿をみると正式の学生ではなく、聴講生としてであり、体育（履修免除）以外の履修科目は普通の学生と同様になっている。その科目は英語が「英語解釈」「和文英訳及英作文」「英文法」「会話及書取」「読方及発音法」「言語学」「英文学」「英文学史」である。そして「国民道徳」、国漢文が「国文」「漢文」、教育が「教育史」「教育学」「教育法」、歴史が「国史」「西洋史」、哲学が「論理学」「心理学」「哲学概論」「倫理学」である。その他「聖書」「文学概論」「社会学」「法制経済」、第二外国語として「独逸語」を履修している。[26]

関西学院には以前大正期において、熊谷鉄太郎、岩橋武夫が、昭和に入って大村善永が入学しており、また本間と同時代には下澤仁、高尾正徳、瀬尾真澄らの視覚障害者が学んでいた。関西学院はこうした学生を受け入れてきた実績があり、それからして、当然本間を受け入れる環境は存在していた。[27]しかし履修していくときのサポート体制は今ほど整ってなく、本人の努力が必要であった。「私は校門の近いところにごく小さな家を借りて、そこにばあやと二人で住み、学業を助けてもらうことを条件に、友人に一部屋を提供することにしました」[28]とあるが、これについても本間家という後ろ盾があってのことであろう。

本間は関学時代において最大のものは「キリスト教の信仰を得た」[29]ことであると回顧している。彼の信仰は佐藤在寛の影響もあり函館時代から求道者としてあったと推察され、関学でそれが完

全な信仰へ移っていったと解せる。「学院では毎日の一時間目の授業の後、十五分ほどチャペルがありました。出席は義務づけられてはおりませんでしたが、私は必ず出て教授たちの特色あるキリスト教の話を聴きました。岩橋先生のすばらしいスピーチもその一つで、同じ失明の者として大変誇らしく思ったことです。ベーツ院長をはじめ、外国人の教授たちからは教室だけでなく、校庭でもよく声をかけられ、家庭にも招かれてごちそうになるなど、個人的にも温かく指導されました。クラスの友人たちにも大変親切にしてもらいました。私はキリスト教の生きた隣人愛を身にしみて感じたのでした」[30]と。そして後年、本間は関学時代のキリスト教と受洗について次のように回顧している。

授業の間の毎日のチャペルにも抵抗なく出て、各教授の説教にも聞き入りましたし、信仰につき友人たちとも語り合いました。仁川に近いところに小さな家を借りていましたので、日曜にはあの道路から直接の階段を上って亀徳牧師の礼拝にも必ず出ました。そうして昭和十二年春の大伝道集会の時を迎えるのです。東京から木村清松牧師がきて熱烈な説教をされ、「君らは今、天国へのぼる道と、地獄へおちる道の分れ目にいる。どっちなのだ」と呼びかけられて決心したわたしは五月十六日、ベーツ院長の前にひざまずき、ついに受洗しました。そのとき、わたしの魂はキリストの手にとらえられ、完全に神にゆだねられたのです。[31]

かくして本間は一九三七年五月一六日に関西学院教会でベーツ院長から受洗することになり、新しい生活に入っていくことになる。

また当然、恩師の岩橋から授業のみならず多くの機会をとおして多大の感化を受けた。岩橋は専門の英文学やミルトン研究のみならず、視覚障害者の福祉向上のための運動を展開していた。

折りにふれて岩橋は彼等少壮の盲学生たちに、日本の盲人の文化は欧米に比しまだ相当遅れている、「日本の盲人の将来は、君たちの双肩にかかっているのだ」[32]と叱咤激励したという。

そして、多くの友人に恵まれたことも指摘しておかなければならない。すなわち神学部には瀬尾真澄（一九三四、入学）と下澤仁（一九三六、入学）が在籍し、文学部に高尾正徳（一九三七、入学）がいた。四人は学部や学年も違ってはいたが、将来の日本の盲人福祉の構想を議論した。ちなみに下澤は本間の点字図書館の事業に対して終生、協力者として斯界の発展にも大きな貢献をしていった。[33]さらにこの時期、先述の中村京太郎や京都の鳥居篤次郎といった関学以外の人物からも影響を受けている。[34]こうした多くの人物との出会いも彼にとっては大きな財産であったことはいうまでもない。

さてここで本間の関学時代の姿を思い起こせる貴重な記録を少し長くなるが労を厭わずみておくことにしよう。それは当時、関学予科に在職し、専門部文学部英文科で日本史の講義をしていた武藤誠の回顧である。

当時はまだクラスが小さく、五〇人くらいだった。授業をはじめると、一隅からカタカタという音がおこる。ひとりの盲人学生が、点字でノートをとるのである。試験の時は別室で、カタカナ・タイプライターで答案をつくった。採点してみると、そのカタカナ書きのがいちばんよくできていた。ほかの学科の成績はよく知らないが、盲人として特別な扱いをうけることなく、りっぱな成績で卒業していった。長い教師生活で、いろいろ変わった学生に接し、それぞれ記憶にのこっているが、この盲人学生の印象はひじょうにあざやかで、ノートをとる点字器の音が、いつまでも耳底にのこっている。

去る五月のある日、思いがけず彼が母校を訪れた。久しぶりに会った。会ったといっても、顔を見ることができるのはこちらだけなのだが、私の声をおぼえていてなつかしがってくれた。幸い戦災をまぬがれて昔のままである校舎を案内すると、ドアーのハンドルや、階段の手すりをなでて「昔のままですね」という。階段の数まで覚えていた。そして、「三十年前の日本の専門学校で、自分のような盲人を入学させてくれるのは関西学院だけでした。おかげで不自由な身体ながら、人生を積極的に有意義に生きてゆくことができました」と限りない感謝の言葉を述べた。

彼の名は本間一夫という。東京にりっぱな点字図書館をつくり、盲人の向学心を伸ばすために、献身的な活動をしている。[35]

そして武藤は「軍国主義の時代に、軍事訓練も受けられないような学生を入学させることは容易ではなかった。それを敢えてなし得たのは関西学院が私学だったからである。私学はこのようなあり方に長所があると思う。また人にはそれぞれ不足するところがある。平均してしかも十分な能力をもつことはできない。自分の能力をうけ入れてくれる学校を見いだし、そこで各人独自の能力を伸ばせば、りっぱに生き甲斐のある仕事をやる力を養い得ると思う」と私学教育の特徴を論じている。

(二) ヘレン・ケラーの来日

本間が関学に入学した翌年、すなわち一九三七年四月に岩橋武夫の尽力もありヘレン・ケラーの来日が実現することになる。[36] 来日を記念して岩橋武夫を中心にして『ヘレン・ケラー全集』全

五巻が刊行される。第一巻は芥川潤、第二巻と三巻は児玉國之進、第四巻は遠藤貞吉、荻野目博道、第五巻は島史也、荻野目博道との共訳である。共訳者の芥川、児玉、遠藤、荻野目は関西学院の同僚であり、島は岩橋が経営している燈影女学院の教員であり、全体的な監修は岩橋があたっている。ここに挙げた教員からも本間は講義を受け、そして影響を受けていたことは容易に推測されようし、彼等からヘレン・ケラーについての話を聞いたと思われる。

岩橋は一九三四（昭和九）年一二月、渡米した時、フォレスト・ヒルズでヘレン・ケラーと逢っており、来日を約束しそれを心待ちしていたが、その悲願がやっと実現した。かくて三七（昭和一二）年四月一五日、ついにヘレン・ケラーの来日が実現し、「奇跡の少女」のコピーで日本全土は歓迎の話題でもりあがった。一八日、東京では国賓級の大歓迎会が東京会館でもたれ、翌一九日には大阪で聴衆二〇〇〇人を集め歓迎会が行われた。岩橋も登壇し「闇の歌は光の歌であつた。一生の闇とたゝかいをつゞけてゆくケラー女史の顔をごらんなさい、なんとにこやかではありませんか、哀しみを征服したにこやかさ、真に暗いものこそ真に明るい、われわれ運命にめぐまれない者にとつてケラー女史の来朝は真に新しい生命の出発を意味する」と自己の体験を語り、彼女の人格を紹介したと報じている。(37)

ちなみに関西の日程では、ヘレン・ケラーは岩橋の母校である関西学院を五月一四日訪問している。その件について『関西学院新聞』は「奇跡の聖女ヘレン・ケラー女史は去る五月十四日午後二時青葉に煙る学院を訪れ多数の外来客を交えて、立錐の余地なき大講堂で彼女の最も愛する学生達への講演を行つた。ベーツ院長は世界で最も名高い二人の婦人を迎へた喜びを伝へた後頌歌五六六番亀徳礼拝主事の祈祷グリークラブの合唱に次いで文学部講師岩橋武夫氏の通訳により、

トムソン女史からケラー博士の生立ちの苦心談があつた」[38]として以下ヘレン・ケラーの講演の内容を簡単に紹介している。恐らく、本間もこの講演を聞いたと思われる。

その彼女の講演の要旨は「『音と色彩から離れた私には哲学こそ与えられた絶好の学問である』と続いて唯一の希望は The world peace and brother であり最も愛する本は聖書である、而して私は幸福である。何となれば私は神に確信があるから」と述べ、最後に学院の学生に対するメッセージとして『あなた方は自らの中に力を見出さねばならない、而して現実の社会に出たときも尚理想を失はぬ様御願ひする』と伝えて降壇、岩橋氏の祈祷、堀副院長の祝祷があつて約一時間に亘つて記念すべき講演会を閉じた」と報じている。

また丁度、日中戦争が勃発した年であり、さらに翌年には国家総動員法が敷かれ、日本は戦時体制へと突入していくことになる。そうした中、帰国したヘレン・ケラーはルーズベルト大統領に日本の報告をし、そして一九三八年一〇月二九日付けで大統領から岩橋宛に感謝状が贈られている。この時期、次第に日米関係が悪化していき、その三年後にはアジア・太平洋戦争へと最悪の結末となるが、こうした交友は戦争前のひとときの休息であった。

このようにして、本間の関学の三年間は過ぎ、一九三九年三月、卒業することになるが、その成績はきわめて優秀であった。[39]ちなみに関西学院は本間が卒業した三九年に創立五〇年を迎え、一〇月一四日に記念式典を挙行している。

ところで、本間には関学を卒業するに際し、いかなる道に進むか、という問題があった。恩師岩橋のライトハウスの事業を手伝うか、あるいは他の事業にするか、しかし彼は将来の自分の事業は点字図書館の創設とその充実であり、盲人の文化発展に貢献するという覚悟はゆるぎないも

のとしてあった。それには、東京での事業が最適であると考えていた。次章でみるように卒業を間近に控え、東京の陽光会の斉藤百合から、招聘の書簡を受け取ることになる。

四、陽光会時代

（一）陽光会との接点

本間は関学卒業後、点字図書館創設という悲願を抱いて東京の陽光会に入り、そこで働くことになる。陽光会は視覚障害者であった斉藤百合が夫斉藤武哉と共に創設した盲女子施設である。[40] そもそも斉藤百合が陽光会の仕事を始めたのは、昭和一〇年代になってからであるが、その濫觴は七年前の一九二八（昭和三）年に遡及することが出来る。

種々の変遷を経て「昭和一〇年の夏、百合は四年勤めた『桜雲会』を退職して、長年の夢であった盲女性のための教育と福祉の事業を本腰を入れて始める決心をした」。[41] その後、百合は若い盲女子の生活の場であるホームの建築に取り掛かり一九三五年に完成する。こうした先駆的な事業の展開の中で重要な仕事としてあったのは、点字雑誌『点字倶楽部』の編集であった。その部数も四〇〇部にまで増加していた。そのような時に本間は関学を卒業し、この陽光会の事業に飛び込んでいくことになる。

ところで本間とこの陽光会との事業とはいかなる接点があったのだろうか。『光に向って咲け―斎藤百合の生涯―』によると、本間は函館の盲唖院時代から『点字倶楽部』の愛読者であり、その頃、この雑誌に投稿した「霜夜の祈り」が、この雑誌に掲載されたことがある。その内容は

「盲界に一生を捧げる決心をした本間が、寒い夜、神社に参拝する話」であったという。そして故郷の北海道から関西学院への往復の時、この東京での宿泊部を利用していた経緯があり、斉藤百合や会のメンバーとも知己であった。生涯の仕事を点字図書館にしたいと熱望していた本間は関学卒業間近に斉藤から点字用紙八枚の書簡を受け取る。それを現在見ることができないが、それは「どうせ図書館をやるのなら、東京はヘレン・ケラーが来た後で諸条件が熟している。卒業したらすぐ東京に出てきなさい」という「熱烈な勧誘の手紙」であったという。[42] 卒業後は恩師でもある岩橋の経営する大阪のライトハウスで一先ず仕事に就き、それから点字図書館をという道もあったが、この斉藤の書簡が最終的には本間の心をとらえたようだ。「私の心は花の東京、文化の中心である東京である東京へと、強く強くゆさぶられました」[43]とある。かくて岩橋にも励まされ、一九三九（昭和一四）年五月、東上し陽光会の事業に飛び込んで行くことになったのである。

（二）陽光会にて

本間が陽光会で担当した仕事は、『点字倶楽部』の編集責任者という業務である。もちろん、この陽光会には視覚障害者のみならず、晴眼者も集まっており、「盲女子たちを幸せにするにはどうすればよいのか、盲人たちが晴眼者と肩をならべ堂々と生きて行ける理想的な社会は、どうすれば築くことができるのか。〈盲女子よ、結婚を恐れるな！〉〈盲青年よ、アンマ・ハリ・キュウ以外の新職業を開拓せよ！〉といった議論が常にたたかわされて」[44]いたという。日々、時には夜を徹しての議論は盲人たち、とりわけ盲女子の不遇な環境を改善していこうという願いは「純粋で奔放とさえいえる若さと夢がいっぱいあふれこぼれていた」のである。[45] 出版の作業は編集の

みならず、印刷、製本、郵便局への運搬等々の雑務が伴うが、多くの協力者によって遂行されていった。この仕事に対して全国に住む数百人の盲女子たちが待ち焦がれ、そして読まれて行くことを考えてみると、やりがいのある崇高な仕事であったといってよい。ここでの仕事はボランティアであったが、本間にとって充実した仕事の日々であったと称せよう。また本間はこの雑誌にも長短はあっても毎号文章を執筆した。編集と発行の様子について、当時の『陽光会年報』は「勿論ホーム総動員、殊に印刷から発送になる頃には飛入りの御客様でもかまわず手をかりねばならぬという忙しさ、ゴーゴーと唸りを立てるモーターの響きを伴奏に、後から山と積もるかさ高な点字の雑誌、追いつかれてはならぬと懸命に槌を振って針金を綴込む、下綴が出来ると表紙の糊付、其れが済むと包装、足の踏み場もない様な混乱が運送屋の手に渡って先ず落ち着くのは大抵十六、七日頃、大風のあとの様な静けさに、疲れた手足を伸ばして送り出した雑誌の効果と反響を案じ合うのであります」[46]と伝えている。

こうした作業は確かに本間にとって初めての経験であり、また既述したように「やりがいのある」そして充実したものであっただろう。点字雑誌の刊行を携わっていくという経験は後の図書館創設とその展開においても血肉となるものであった。

そうこうしている内に、本間は斉藤の長女と親しくなっていく。アルベルト・シュバイツァーの『わが生活と思想より』や『水と原始林のはざまで』等を読み互いに感動したという。斉藤の娘は女医でもあり、シュバイツァーの仕事に、また本間にとって不幸な境遇に置かれている人の無私の精神で献身する所に共感するところがあったのだろう。しかしこの「恋」も結局は結ばれることなく、本間は自己の抱懐する天職に邁進していくことになる。

五、日本盲人図書館の創設

（一）日本盲人図書館の創設

関学を卒業し、陽光会で働きながらも、本間は抱懐していた点字図書館の建設の夢を持ち続け、一九四〇（昭和一五）年一一月一〇日に、自身の蔵書をもとに「日本盲人図書館」を東京豊島区雑司ケ谷二丁目四二六番地に創設した。ちなみに「日本盲人図書館」の看板を自宅に掲げたのであるが、それを書いたのは実父の内山述作であった。

もちろん、日本各地において点字図書館は大正時代から存在した。しかし、それは二〇〇から三〇〇冊程度の小規模なものであり、本格的な点字図書館をめざしたものではなかった。その意味で本間には少年時代からの夢の実現、ひいてはその構想があった。本間は開設当時につき「昭和十五年十一月十日の日本は、津々浦々に、国をあげて紀元二千六百年を祝う万歳で湧きかえっていました。わが日本点字図書館も、この日、豊島区雑司ヶ谷二丁目四二六番地の二階建ての小さな借家で、呱々の声をあげたのです。そしてまたこの日は、明治二十三年十一月一日、石川倉次によって日本訓育点字が考案されてから、ちょうど満五十年目の記念日の九日後でもありました」[47]と回顧している。

この開館記念日には好本督、斉藤百合、雨池信義らが出席したとある。とりわけ好本の「今日、本間さんは日本の盲人のためにということで、点字図書館をここに開かれました。しかし、神さまのもっとも豊かなお恵みを受けるのは、誰でもなく本間さんあなた自身であることは、まちがいありません」[48]という言葉が彼を感動させ、忘れることが出来ないと述懐している。キリスト者

同志、そしてその事業の困難さを推し量るに十分なメッセージであった。

一方、一九四〇年一一月一〇日発刊の『点字図書館ニュース』創刊号で、本間は次のように述べている。

私が点字図書館を自分のライフワークにと思いたったのは、関西学院入学を志してその準備に忙しかったころのことであります。爾来数年、遂に確固として抜くべからざる使命感にまでなってしまいました。別にこれといった霊感的な動機があったわけではありませんが、私たちの世界が読み物に如何に乏しいかということだけは、人一倍痛感してきたつもりです。殊に私を寂しがらせたのは、何か書き物でもまとめようとして友人と普通図書館へ出掛ける時でした。眼さへ良かったらほとんど無料で読まれる本が、こんなにもあるのにというそのいらだたしさは、われわれ盲人の世界にも、ぜひこうした機関を設立しなければという固い固い決心ともなったのであります。(49)

続けて本間は「そしてこのことは、『権利において、義務において、晴盲二つの世界があくまでも公平でなければならぬ』という私の持つ盲界社会事業理念の表れともいい得るのであります」と、人間として平等であるべき理念を主張している。本間の個人的な悔しさは盲人であるがゆえに、社会的になおざりにされていいはずがないという権利思想が窺える。こうした思念があるからこそ、その道の先駆者ともなり、また継続的な努力、あるいは人を動かす力があったと思われる。さらにこの事業の目的として「一、五ケ年計画でもって図書館の本建築を完成させること。二、五年を出でずして、蔵書五千冊を突破せしむること。三、専ら写本に重点をおき、古今の良書の点訳につとめること」の三点を掲げている。

その後、翌一九四一年三月七日に現在の新宿区高田馬場に移す。つまりそこに北海道の本家の援助によって建ててもらってのことであった。下が四間、二階が二間あり、玄関脇の洋間を書庫と仕事場にし、四月から斉藤千代を職員として雇用し、二人のコンビで経営していった。

そして、一九四一年六月の『中外商業新報』には「光明の盲図書館　一盲人青年が信念の設立」というタイトルの下で、「盲ひの身を雄々しく立上り、同じ不幸な境遇にある全国十万の盲人のため図書館を開設『昭和の塙検校』の出現を待望しつゝ文学、科学その他凡ゆる部門に亘る広範囲な点字書籍の無料貸出しを行つてゐる一青年がある―淀橋区諏訪町二一二日本盲人図書館長本間一夫氏（二七）がこの話題の盲青年だ」として、当時の本間の人となりや事業について写真入りで紹介されている。[50]その中で、本間は次のように抱負を語っている。

現在出版されてゐる点字書は一千種類位ですが、それは盲人の職業と関係のある医学書ばかりで、しかも普通の書籍より四、五倍の高値で貧困者の比較的多い盲人にはちよつと手がでません、私は之等の問題の解決に乗出した訳です、外国では貴夫人などが紹刺しと同じやうに点字を趣味とし、写本を盲人図書館に寄贈するといふことです、日本でも最近眼の見える人々の間にこの点字運動が起つて、中野区の稲枝京子さんといふ方は、一日二時間づゝ写字をして随筆集や童話集を寄贈して呉れました。

英国の一七万冊といった規模とは比較すべもないものであったが、兎に角、夢の一歩を踏み出し、そこを拠点にして、事業を多くの協力者のもとで開始していった。たとえば点訳奉仕運動が展開されるが、これに貢献したのは次にふれる後藤静香であった。

（二）後藤静香と点字翻訳運動をめぐって

漸くにして点字図書館を創設し、新しく船出をしていったにも関わらず、大きな課題は如何に点字図書を増やしていくかということにあった。当時、資金もなく、またそれ以上に商業ペースに乗らない点字図書は量的にもかつ質的にも制限があることはいうまでもない。そうした時、後藤静香による点訳奉仕運動の提唱によって救済の手が差し伸べられた。

後藤静香（一八八四～一九七一）は大分県竹田の生まれで東京高等師範学校の数学科を卒業後、大分高等女学校や香川女子師範学校で教育に従事している。[51] 後藤は一九一八（大正七）年、「希望社」（社会運動団体）を設立し、修養雑誌『希望』を発刊し、また、『のぞみ』『光の声』『泉の花』『大道』等の雑誌を発行して、人間の修養の大切さを説いた。さらに「希望社運動」「心の家」と呼ばれる社会活動を展開し全国に一〇〇万と呼ばれる賛同者を擁した。彼の社会活動は広く、その中にハンセン病患者の救済活動や福祉活動等も含まれ、点字翻訳の活動もその一環として位置づけられていく。

後藤の盲人への関心は大正時代から始まっている。例えば一九二三年七月の『希望』には「愛盲運動」の特別号を企画し、積極的に愛盲運動を展開している。その中で「書物の欠乏」として「彼らが、何よりもほしいと思っているのは、書物である。点字で書いた書物を見たい。これが最大の願いである。彼らはまったく飢え切っている。読みたくても何もない。生理とか、解剖とか、お灸とかあんまとかの書物がいくらかあるが、心の養いになるものや、普通学の知識を補充するようなものはほとんどない」、あるいは「盲人開発の最善の道は、有益なる著書の出版にある。彼等の世界が、未開墾であるだけ、今たがやせばなんでも植えつけられる」云々と点字出版の急

務を世間に訴えていた。[52]そして「盲人修養会」を立ち上げ、点字出版の大切さや盲人の点字の習得等の活動を展開していた。

本間も「日本点字図書館が創立されたのは昭和十五年であった。しかし当時点字作りについては、関係者の間に何の目鼻もなかった。たまたまこれを知られた先生（加藤静香―筆者注）は、すすんで点字を学ばれ、ご自分の著書を次々と点訳される一方、同志によびかけて晴眼者対象の点字講習会を毎月開かれたのである。これが日本における点字奉仕運動の草分けであり、そこから生れた貴重な点訳書は、日本点字図書館に大きな魅力を与え、そのスタートを順調なものとしたのである」[53]と後藤との邂逅、そして彼の功績を高く評価している。

後藤は本間の活動を知り、点字図書館創設と時を同じくして晴眼者対象の点字講習会を開いている。第一回が一一月三日であり、以降月二回のペースで講習会が開催され、点字の翻訳作業が進展していくことになる。ちなみに一九四一年一二月、第一回点訳奉仕者感謝会を開催し、図書館創立一周年の記念誌を刊行したが、これを見て加藤善徳という人物が後藤によって紹介されることになるが、この加藤こそ後に点字図書館において本間の活動や事業を支えていくことになる人物である。[54]またその前月一六日には東京盲人会館にて創立一周年記念会を開催している。これには読者や点字奉仕者ら一〇〇名が参加した。これを機会にして東京府盲人協会会長橘江市等の発起によって「日本盲人図書館敬助会」という盲人の読者による後援会が組織されることになる。

六、戦時中における新図書館の創設、結婚、そして疎開

（一）新図書館の創設

一九四一（昭和一六）年一二月八日、日本は真珠湾を攻撃し、米英に宣戦布告をしアジア・太平洋戦争が勃発した。盲人図書館を立ち上げて一年後のことであり、本間にとっても、将来への希望を抱いていた時だけに、一抹の不安が醸成されたことはいうまでもない。[55] 翌四二年七月三〇日に日本盲人図書館編として『點訳のしおり』が発刊された。そして新しい図書館の建設が進んでいく、これについては、竣工前ではあるが、その年の春、『朝日新聞』に「盲人の尊き勤労に点字図書館生る」という見出しで、本間と建設中の写真を掲載しそれへの報告がなされている。[56]

「両眼を戦場に捧げた幾多勇士や、全国十万といはれる盲目の同朋たちのために去る十五年以来日本で唯一の盲人図書館を経営して、光無き人々の文化運動に尽してゐる本間一夫氏は、最近点字図書利用の激増に応へて東京淀橋区諏訪町二一二の現図書館の傍に、更に新館を増築中のところ、近く竣工を見ることになり、全国の失明者から大きな喜びと期待をもつて迎へられてゐる」として次のように報じている。

これは二階建三十三坪余の洋館で経費三万円の半分は本間氏の自費残りは全国盲人有志の勤労の醵金などによるもの、点字図書の閲覧は殆ど貸出しで、北は樺太から南台湾に至るまで全国の利用者は千四百人で、現在ある図書館の蔵書千五百冊では不十分なところから同館の付帯事業として後藤静香氏が主宰してゐる大日本点訳奉仕団員二百名が、毎年千冊の点字本を点訳製本して、全国から殺到する申込に応ずるため涙ぐましい奉仕の努力を続けてゐる。

……以下略……

さらにこの記事の最後に本間の発言が掲載され、それには「点字書は、普通の書籍の三倍も厚みをとるので、図書館も手狭です、外国では上流婦人が絽刺と同じやうに、趣味の点字を習得し、この方面に奉仕的にやつてゐます、日本でも婦人や女学生たちが、比較的簡単に覚えられる点字を習つて失明勇士への便りや、自製の書籍の贈りものでもしたら、どんなにいゝ慰問になるかも知れません、この方面への同情的奉仕を心から希望してやみません」とある。

かくして一九四三年七月に高田馬場に新図書館の落成式が挙行された。これを機会に『日本盲人図書館だより』第一信が発刊されることとなる。

▽お喜び下さい。御協力と御支援を賜つてをりました日本盲人図書館の落成式は、去る七月十八日成功裡に終りました。▽式は、ラジオや新聞で既に御承知のように、約百八十名の援助者並びに利用者が、都下及び近県から参集されました。▽特に陸軍病院からは、白衣の天使に手を引かれた失明勇士が約四十名も元気な足取りで参列されました。▽式は定刻午前十時開会、国民儀礼、国家斉唱の後、佐藤勇氏の工事経過報告、本間館長の挨拶の後厚生省、軍事保護院、東京盲人会館其他から懇篤なる祝辞が寄せられました。▽続いて失明勇士を代表する成田軍曹並びに一般盲人代表の感謝の辞があり、終つて後藤大日本点訳奉仕団長の記念講演があり、来会者に深い感銘を与へました。……以下略……

このように新図書館の開館式も戦時色が色濃く出る中での式典であった。しかし本間にとってこの事業は休むことの出来ない事業であったのだ。

ちなみに本間は一九四三（昭和一八）年六月二一日、後藤静香の媒酌のもと吉祥寺教会で藤林

喜代子と結婚式を挙げている。牧師は竹森満佐一であった。[57]そして媒酌人には本間の事業を支えてくれている後藤静香夫妻が当たった。しかし戦争はますます激しくなるばかりで、終わりのない泥沼の中で、所謂「失明兵士」も増加の一途を辿っていった。そうした中での結婚式でもあり、兵役につけない本間の仕事は点字図書館の運営でもって必死でやっていかなければならない不可避のものであり、これが本間にとっての戦争でもあった。しかし一方で家庭の平安が築かれた一時でもあった。すなわち次節でみるように疎開先で、四六年五月に長男（一明）が誕生する。

（二）疎開―茨城、増毛

一方、東京は次第に戦火が激しくなり、図書館は新築して一年も経たなかったが、貴重な点訳書を守るため茨城県結城郡に疎開する。疎開先は色々と物色した末に、浅草今戸の蓮窓寺の住職安藤良甫の斡旋によって茨城県結城郡総上村で、新築された末寺、三月寺を借りることとなる。点字書二千三百冊、書棚五本を保持しての疎開であった。そこは「直線距離にすれば東京から五十キロほどの所なのですが、上野から常磐線に乗り取手で常総鉄道に乗りかえ、下妻で下車するまでには、どうかすると四時間近くもかかりました。三月寺といっても建物はまったく住宅風で、カギの手に縁側のついた二間に土間と台所、けっして広くはありませんが、われわれ夫婦が生活して、少なかった点字書の貸出しを行うには十分でした。」[58]とある。加藤善徳一家も別室に移住していた。戦時中で物不足でここが全国の盲人達の要求を何とか引き受けている状況であった。

こうした状況のなかで約一年間、この疎開先で本間は彼なりに戦時の責務（奉公）として挺

身していった。一年間の貸し出し数が一万一八六五冊に達していたことからそれを窺い知ることが出来る。しかし一九四五（昭和二〇）年になると、東京は空襲が激しくなり、本寺の浅草蓮窓寺も焼失し、住職安藤家もここに疎開してくることとなり、また貸出という事業も困難をきわめ、第二の疎開先として故郷増毛の選択を余儀なくされることになる。かくて四五年四月、本間は三千冊近い点字本とともに故郷に帰ることとなった。

ところで点訳奉仕活動は戦火が激しくなった状況でも継続して続けられていった。そして一九四四年七月三〇日、謄写版刷りの雑誌『点訳通信』が発刊されることになる。その第一報には「苛烈な戦局下に、お暑さが続きます。皆様お変わりもございませんか。決戦生活の寸暇をさいて、今日も黙々と点筆を奮っておられる皆様に、私共は何とお礼を申上げたらよいのでしょうか。単なる感謝という言葉をもっては、尽くしきれない感激であります」[59]と述べ、各地からの点訳本の寄贈について書いている。第二号は同年一〇月三〇日、そして三号は同年一一月三〇日に刊行されたが、休刊となる。ちなみに第四号が復刊されるのは、戦後の四九年二月一日である。「こうして自分を取り戻した私は、それから二年五ヵ月、この日本の北端から全国に向って、点字書の貸出しを一生懸命つづけ」[60]ていったのである。この間に東京の家（日本盲人図書館）は焼失した。かくして故郷にて八月一五日を迎える。八月十五日、「重大放送があるというので、母をはじめ皆が茶の間に集り、正座して膝に手をおいて聞いた天皇陛下の言葉は、やはり大きなショックでありました。しかし、戦争は終った、助かった、という安堵感と、灯火管制から解放されたという喜びがわれわれの胸に去来したのも当然です。田舎のことですから、大都市のように進駐軍をおそれる心配はありませんでした」[61]と当時を回顧している。

七、戦後（一）再建ー東京へ、そしてヘレン・ケラーの来日

一九四五年八月、広島と長崎に原爆が投下され、ソ連も参戦し、政府もポツダム宣言を受け入れ無条件降伏することになり、アジア・太平洋戦争は終焉した。最後には沖縄が戦場と化し、また本土への空襲にて国内の被害だけでも相当なものであった。そして「占領軍総司令部」（ＧＨＱ）が本土の占領政策を実行していった。このＧＨＱの指導の下、多くの改革、所謂戦後改革が断行されていった。とりわけ国の根幹となる新憲法（日本国憲法）が四六年一一月公布され、翌年五月に施行された。しかし巷にはいわゆる「戦災者」のみならず「戦災孤児」「引揚者」、そして障害者、失業者があふれていた状況で、誰もが戦後を必死に生きていった。八〇〇万人に喃々とする人々が食糧問題や生活問題等々で苦しんでいた。

終戦を故郷北海道増毛で迎えた本間は、一九四八年三月、再度、東京に戻るまでの約二年半、この地で全国の視覚障害者に対して点字書を送る仕事を継続していった。二〇〇〇冊程度あった貸出し数も、四七年には四〇〇〇冊に増加したという。読者も四〇〇名以上になっていた。増毛では、本間の事業を支えてくれる幾人かのボランティアも登場することになる。しかし彼の事業はこの増毛ではなく、再度、東京に打って出て、点字図書館を大々的に発展させていくという野望があったし、それが戦争のため中断を余儀なくされていた。関学時代の盲学生仲間である高尾正徳は島根で県会議員として活動していたし、瀬尾真澄は大分で大分ライトハウスを立ち上げ、下澤仁は彼の母校横浜訓育院で教壇に立っており、それぞれが活躍していた。「ちょうど十年前の学院時代を思い出すにつれ、自分だけが取り残されてしまったという耐えがたい思いに日夜さ

いなまれ始めていた」[62]と当時の心境を吐露している。こうした時、本間の耳に勇気づけるニュースが入ってくる。それはヘレン・ケラーの再来日という朗報であった。「このチャンスを逸しては、いつの日にか上京が叶えられよう、なんとしても東京へ帰らなければならない―こう決心して、われわれの行先を心配している母に訴え、高田馬場の焼けあとに、十五坪の木造住宅を建ててもらうことになったのです」[63]。こうして、ヘレン・ケラーの来日予定を追い風にして本間の点字図書館の活動が再開されていくことになる。

(一) ヘレン・ケラーの再来日をめぐって

新しい憲法が発布されたとはいえ、日本の福祉制度は旧生活保護法、児童福祉法等が戦後直後に制定されたが、障害者に関する法律は立法化に進捗が見られず、福祉の課題も前途多難な状況であった。国民の多くが生活問題に苦しんでいる状況で、人々は日本の再生というより、必死に小さな希望を抱きながら生きているという状況であった。そうした中で福祉界、とりわけ障害者の世界において大きなニュースとなったのがヘレン・ケラーの再来日である。

既述したように、ヘレンは本間が関学の学生であった一九三七年の四月に来日したが、これは岩橋武夫の功績が大きかった。そして今度の再来日も岩橋と関係している。岩橋は戦後、政治の側からも視覚障害者関係の法律制定を視野に入れて一回目の衆議院選挙に立候補したが、次点で落選しそれは実現しなかった。そうした時、戦争で途絶えていた岩橋とヘレン・ケラーとの交友が再開されることとなる。四六年三月一一日のヘレンからの書簡には、

親愛なる武夫様

ポーリーがあなたの手紙を私に読んでくれた其時やさしき思いが私と彼女の心を温めました。其の心は確かにあなたに対し、そして又あなたが勇敢に導きつゝある日本の不自由な人々に対して温めものでありました。何にしてもあなたの手紙は歴史の最も暗き年々と貫いた私の信念に対する最も尊き確証であります。―その信念とは海上における苦痛や難破に関らず諒解と名付けられる深く底を行く海底電線は決して相互の連絡を切断し得ないという事です。私は再び仏陀の微笑を以てお互いのメッセージを交換し得る日の来たことを感謝します。(64)

と記され、二人の関係が再開されることになる。ここには「私は再び仏陀の微笑を以てお互いのメッセージを交換し得る日の来たことを感謝します」(I am thankful that we can again transmit messages with Buddha's Smile in them to each other)と認めるように、ヘレンらしい日本を意識した大きな喜びが表現されている。岩橋も書簡を認め、交友が再開されていく。そしてヘレンを動かすこととなるのである。

一九四七年六月一四日付のヘレンの書簡にはアメリカバイブル協会のストファー博士と訪日のことを相談していることが記され、「もし私達の健康状態がよく、旅行条件が少しでも改善するならば、一九四八年後半から四九年頃極東方面へ行けるかと思っています」(65)という文面がある。しかしヘレンの家が焼失するという不幸があった。日本での思い出深い品々が無くなってしまったという深い悲しみがあったことはいうまでもなく、そのためにも訪日はヘレン自身、期待するものであった。同年一一月一日の書簡には訪日に対して「確実な返事」が出来ることになった喜びが伝えられている。そこには「八月までには日本へ行けると思います。このことはマッカーサー

元帥に伝えました」[66]とある。

また、一九四七年一二月二二日のヘレンからの書簡には、翌年の八月二〇日から三〇日には日本に行けるという具体的な報告がある。[67]かくて四八（昭和二三）年一月に、毎日新聞社はヘレンの招致責任者たる岩橋に全面協力し、全国に募金運動を展開するという報道を行い、「ヘレン・ケラー・キャンペーン委員会」（ＨＫＣ）が結成され、組織として展開されていくことになった。このような動きを本間は北海道で知ることになり、再度東京に行くことを決心する。すなわちこうした戦後の新しい運動に本間は東京において、日本点字図書館の再開という方法でもって応えようとしたのである。早速、高田馬場に新しく住宅を構え、名称を「日本盲人図書館」から「日本点字図書館」と改称して活動を再開した。その後、本間は一方ならぬ努力と苦難を克服し多くの協力者の支援のもとに図書館の充実に粉骨砕身していくことになる。

ところで一九四八年になって、上記のＨＫＣを拠点にそれが展開していくとき、それを推進していく「日本盲人会連合」という組織体が結成されることになる。『日本盲人会連合五十年史』（日本盲人会連合、一九九八）によれば「盲人の文化的、経済的向上と社会的地位の躍進を図り、進んで平和日本の建設のために寄与せん理想を掲げ」、同年八月一七日と翌日、大阪府下貝塚市において全国から七〇人の参加を得て「日本盲人会連合」（「日盲連」）が組織され、記念すべき結成大会が催された。[68]そして会長には岩橋武夫が就任した。もちろんここには八月末のヘレン・ケラーの来日という背景があった。日盲連はこのヘレン・ケラーの来日を意識して結成されたが、来日の宣言と決議にそれが物語られている。宣言には「時は来た。新時代の太陽は昇らんとしている。今回、はるばる来朝せんとするヘレン・ケラー女史の、献身的愛盲の赤誠に応へ、ここに

挙国的な盲界の一大統合を期した我等は、敗戦の文化的、経済的向上と、社会的地位の躍進を図り、進んで平和日本建設のため、真に人道的使命に立脚し、社会公共のために寄与せんことを誓う」[69]というものであった。この会の結成において、本間は自己の点字図書館の再開に追われてか、会との具体的関係は不明であるが、二年後の一九五二年から理事に就任し、岩橋を助けていることが看取できる。

また、少し遅れて「日本盲人キリスト教伝道協議会」という組織も誕生する。もちろんこれには戦前から「盲人基督信仰会」という組織があった。戦後、既述のヘレン・ケラー来日に際し、ジョン・ミルトン協会総主事のストファー夫妻も来日し、ストファーは「盲聾唖の福祉」について各地を講演した。これが契機となって一九五〇年八月、日本キリスト教団と盲人側の双方が出席し、日本盲人キリスト教伝道協議会の発起人会が開かれることとなった。日本キリスト教団からは、友井禎（総主事）、柏井光蔵（伝道部長）、高橋良（主事）が出席し、盲人側からは好本督、中村京太郎、熊谷鉄太郎、喜久田倫章、今村幾太、大村善永らが出席している。そして翌五一年七月、箱根において日本盲人キリスト教伝道協議会の創立総会が持たれ、ここに全国的な組織がなり、盲人伝道はさらなる展開をみせていくことになる。この総会で盲人側から選出された一四名の代表者の中に本間の名前もある。そして本間を含め、熊谷鉄太郎、岩橋武夫、大村善永、瀬尾真澄の五名の関学の出身者の名前を見出すことができる。これも熊谷や岩橋の蒔いた種の結実と解せよう。さらにここには本間が点字図書館以外で、キリスト者として福音を伝えていこうとする一面も察知することができる。

このヘレン・ケラーの再度の来日は成功裡に収めることができた。ヘレンは一回目ほどでは

ないが多くの地域を廻って講演活動を展開した。広島や長崎も廻り原爆投下の実態も肌でふれた。日本贔屓であり、かつ平和主義を掲げる彼女にとって、それは痛ましい戦争の爪痕の確認でもあった。そして何よりも岩橋と協力しながら身体障害者福祉法実現に向けての努力は特筆すべきものである。さらにその機運に乗じて点字図書館は少しずつ活動が根付いていくことになる。

(二) 事業の展開と受賞をめぐって

本間は『耳と指で読む』の中で、長い図書館の歴史の中で、「最も記念すべき時期は?」という質問が発せられたら、「二十九年の後半から三十年の前半」[70]にかけての一年間を挙げたいと述べている。それは「厚生省から事業委託を受けて、図書館の乏しい予算に国費が加えられる」[71]ことになったからである。これによって点字出版が可能となったこと、そして全額国の予算で新館が建設された。

一九五五(昭和三〇)年一〇月、アジア盲人福祉会議が東京で開催され、一〇数カ国が参加した。その初日(二二日)に本間は「日本の点訳奉仕と点字出版」という題で英語で講演をおこなった。「越えて二十二日には、インド、セイロン、マレー、韓国等の盲人代表と、欧米先進国から出席していた盲教育や福祉の権威者たち二十数名が、わが図書館を公式訪問し、熱心に見学しました。金森理事長をはじめ、館をあげて歓迎しましたが、これは図書館の歴史の記念すべき一日」[72]となったと回顧している。国際的にも図書館の存在意義が認められたという喜びであったろう。

こうした彼の事業は一九五三年に「朝日社会奉仕賞」を受賞へと結びついていくことになる。この件が同年の朝日新聞朝刊に掲載されたことによって「その朝は、続々と電話がかかってきま

した。また、たくさんの祝電・手紙が寄せられました。中には長らく消息の絶えていた人もあり、まったく未知の方もありました。身近な協力者の方々が心から喜んでくれたことは、申すまでもありません。また北海道の郷里増毛町の人たちも祝福してくれ、特に母が、新聞の上にポトポト涙をこぼしたと知らされ、私もこみあげてくるものをどうしても押えることができませんでした」[73]と述懐している。

その後も「藍綬褒章」（一九七一）、「吉川英治文化賞」（七七）、「毎日社会福祉顕彰」（八二）、「勲四等旭日小綬章」（八五）等、多くの章を受けた。また、九〇年には故郷増毛町から「増毛町の名を全国的に知らしめてきた」として表彰されている。そして九八年四月二日の『点字毎日』は本間が母校関西学院から「Distinguished Achievement Award」（優れた功績に対して贈る賞）が宮田満雄院長から贈られたことを報じている。その記念の盾には英語点字で「本学のスクール・モットー『マスタリー・フォア・サービス』の真の精神を人類の福祉のために具現し、母校の最も誇りに思う卓越せる同窓生本間一夫氏」[74]と記されその功績を讃えた。これに応えて本間は「今日あるのは関学で三年間勉強させていただいたことが大きな要因。お世話になった先生方のことは鮮やかに覚えている。ご健在の方がいらしたら直接お礼をしたい」[75]と喜びの声を掲載している。

八、世界への飛翔

（一）第三回世界盲人福祉会議への出席

本間は一九六四（昭和三九）年の夏、ニューヨークで開催された第三回世界盲人福祉会議に

日本代表として加藤善徳と共に出席する。それは大会出席のみならず、九カ国一七都市、四〇数施設を歴訪する長旅であった。七月二五日に羽田を出発し、九月一二日に帰国するまで約五〇日間費やしている。本間にとって初の外遊でもあり、生涯で又とない絶好の機会であった。これについては、本間は加藤善徳と共著の形で『欧米の盲人福祉をたづねて』（日本点字図書館、一九六五）という著作を上梓しており、それを紐解くことによって詳しく知ることが出来る。[76] 少しくその旅を追ってみることにしよう。

七月二五日、羽田からの飛行機は快適であったと記している。本間たちは、最初にハワイに立ち寄り、ホノルルの点字図書館を訪問している。快いハワイの風に吹かれた後、サンフランシスコに飛ぶ。「サンフランシスコの僕の第一の思い出は、恐らくこの風のなんとも云われない心地良さ」（二七頁）と記すように初の異国の雰囲気の身体での感覚であった。二九日にはロサンゼルスに移動し、そこではブレイル・インスティテュート・オブ・アメリカを訪問し、「何とも形容のできない感動を受けました」とあり、点字図書がぎっしり詰まった書庫が四つ、点字蔵書二万五千、トーキング・ブック・コンテーナ（箱）二万二千等々のスケールに驚き、そして「しかし下手な英語も必死になればどうやら通じます」と喜びを報じている（二八頁）。

その後、アメリカ大陸を横断し、七月三〇日にニューヨークに会議の出席のため移動している。ニューヨークではヒルトンホテルに宿泊して会議に出席している。「一昨日、昨日は大体会議中心にすごしました。内容そのものはまあまあですが、ジャービス（英）、ベーカー（カナダ）、シュトレール（独）などの声を聞いた瞬間、一種の感動がありました。シュトレールとはレセプションの時いろいろ話しましたが、聞きしにまさる力強さを感じました」（三一頁）とあるように、

次第に会話の楽しさを経験している。この会議には遅れて、岩橋英行・明子夫妻、高橋豊次、高尾正徳、木村龍平らも参加した。

八月八日付の報告ではニューヨークへ来てから既に一〇日経ったこと、この間、施設見学を精力的に行っている。本間がニューヨークで確認した一つは、アメリカでは点字図書館の存在もさることながら、それよりも生活訓練ホーム、授産所、小さな相談事業等が整備されているということであった。つまり盲人一人一人の生活の充実を最重要課題に力点が置かれているということであった。見学したなかでも、ジェウイッシュ・ギルドとライトハウスに感動している。その施設見学やそれが経営する盲老人ホームの設備の立派なことに驚いている。そしてニューヨークのライトハウス、レコーディング・フォー・ザ・ブラインドといった施設、そしてザビエー盲人協会、ジョン・ミルトン協会等の訪問の機会を得た。

八月一五日の報告では、この間一週間のことが書かれてある。九日、ニューヨークから汽車にてボストンに行き、一〇日にパーキンス盲学校を訪問している。三五エーカーの広大な敷地に生徒が三二五人、先生一五一人「設備に至っては至れりつくせりというもなお愚かです」（三六頁）と認める。トーキング・ブック等の設備に驚き、ウオーター・ハウス校長夫妻と昼食で歓談した。翌一一日はワシントンへ行き、国会図書館も訪問している。その後、シカゴに行き、ミシガン湖等をドライブする機会を持っている。その後ルイビルへ行っている。これまではアメリカからの点字での送信であったが、その後はヨーロッパからの便りである。一九日にシカゴからロンドンに飛んでいる。

さて、ロンドンでの日々、とりわけ「少年の日から三十数年夢に見ていた」ナショナル・ライ

ブラリー・フォー・ザ・ブラインドを訪問する。タイトル八万七千、三五万冊に喃々とする、その蔵書規模の大きさに圧倒される。「ここへ来てはじめて点字の威力、点字の底力を、まざまざと見ることができました」（三九頁）と報告している。このライブラリーの訪問は「長年の夢がはたされた安堵感か、わずか二時間半ではものたりなかった淋しさか、胸がこみあげて困りました」（四〇頁）とある。その後、ナフィールド・ライブラリーを訪れる。ところで在英中の出来事で記しておかなければならないことは、オックスフォード在の好本督宅への訪問である。好本の家は「ヘデングトーン町のキルン・レーンという静かな住宅街で、瀟洒なお住居の前庭は、美しい花でいっぱいでした。英人の奥様には初対面、たいへん喜んでくれました。この春おくられた第一回点字毎日文化賞の賞状や楯など、見せていただきました。八十五才になられたという先生は、十年前と少しも変らぬお元気さ。それでもお疲れを案じながら、つい二時間近くお話を聞きました。イギリス盲人福祉の根底は何か、アジアの盲人につくすべき日本の立場などと、諄々と説かれる一言一句は、深い信仰からあふれ出るもので、強く打たれました」（四一頁）と認められている。

本間はその後、パリに飛んでいる。八月二六日にはパリ郊外の点字の発明者ルイ・ブライユの故郷クーブレイを訪れている。[77]「世界何千万の失明者の不滅の光が、ここから発っしたと思うと、そして再び訪れることもなかろうと思うと、立ち去り難いものがありました」（四四頁）と。そして二十七日にはパランタン・アユイ協会を訪問している。

さらにドイツに移動し、ハンブルグでは学校と図書館を訪れ、またマールブルクのドイツ高等盲学校を訪れている。そして最後にローマに飛んでいる。ローマではコロシアム、カラカラ浴場、

フォロロマーノの遺跡等々を見学し、そしてイタリア盲人協会、ローマ・テープライブラリーを訪問している。

この世界盲人福祉会議の出席は、世界からの多くの学び、実地体験を含め、本間にとって本当に大きな経験であったことは言うまでもなかろう。そして多くの盲人用機器を購入し、土産として持ち帰ったのである。これらはその後の点字図書館の発展に役立っている。

その後、本間は一九六九年、七〇年、七八年と三回、海外、特にアジアに行くことになる。すなわち六九年には、インドのニューデリーでの世界盲人福祉会議への出席。七〇年には八月九日から二四日まで、韓国にて韓国特殊教育研究会への出席。七八年は一二月二日から九日まで、香港で開催されたアジア盲人福祉会議への出席であり、この会議には二四カ国が参加した。こうした会議において、それは日本の点字図書館の発展ということはもちろんであるが、そこには世界の視覚障害者たちの福祉を考えての出席であったと思われる。日本は模範とした欧米の先進国には及ばないとしても、とりわけアジアにおいて日本はその面で支援やアドバイスを与えられるところまで成長していた。アジアの国々の視覚障害者の福祉のためという、そうした思念があったと思われる。本間の事業と思想は世界を見据えたところまで射程を延ばしていったのである。そして彼の畢生の事業は多くの協力者のもとで発展していった。ここには彼の人を動かしていく人徳のようなものも存在した。

結びに代えて

本間は二〇〇三年八月一日、心不全のために八八歳の生涯を閉じた。当初、葬儀は近親者のみで密葬で行われた。そして当時の新聞には九月九日に日本点字図書館主催の「お別れ会」が全国社会福祉協議会・灘尾ホールで行われることが報じられている。『朝日新聞』は「見えぬ目へ心の本届けて」というタイトルの追悼を寄せている。[78] その中で、当時館長であった岩上氏が「経営安定のため、もっと公的な援助に頼ったらどうか」と進言した時、本間は「本当に大切なのは人の心。これを事業の基盤にしたい」という信念を語ったという。また本間が死の数日前に「今日の図書は会合はどうなったかな」と看病者に聞いたというエピソードも紹介し「本とともに駆け抜けた八七年だった」と追悼している。

五歳で失明という体験をしながら、函館盲唖学校で点字を習い、少年時代からの読書の喜びを自分だけでなく、視覚障害者すべての人に味わってもらうためにも、点字図書館の創設とその充実は彼にとって畢生の事業であった。確かに彼は恵まれた環境にいたことは否定すべくもないが、その思念には健常者と同様の権利、そして国の文化として捉えていたといえる。また図書館創設後も多くの有力者、そして無名のボランティアの協力があったことは見逃せない。しかしそれも彼の人徳、あるいは情熱によるものであると思われる。

宮田満雄（元関西学院院長）は、本間の関西学院時代での思い出につき「礼拝や讃美歌を歌ったりして宗教的な雰囲気に浸れたこと。なかでも人間にとって最も大切なのは『心』だと教えられたことです」という本間の言葉を引きながら、「それぞれに信仰を与えられ自らの障害を克服し、

同じ障害を持つ人々のために献身された、これら先輩達が残された伝統は今でも生きて働いています、聖書にある通り、全力を注いで主のわざに励む時その労苦が無駄になることはないのです」[79]と評している。

本間は『指と耳で読む』の末尾で、自己の人生を次のように振り返っている。

私はつくづく思うのです。若し私が失明していなかったならば、私の人生は全く別なものになっていたでしょう。恐らく北海道の一隅で、ごく平凡な一生を送っていたに違いありません。その平凡な一生にも、それはそれなりの価値はあったことでしょう。しかし、まぎれもない事実は、失明したればこそ、この点字図書館という意義ある仕事を与えられ、多くの愛と善意の人々にめぐりあい、助けられ、はげまされて、この一筋道を歩み続けることができたということです。神の計画ははかり知ることができません。神は失明という苦難を通じて、私をここに導き、今この地点に立たせておられるのです。何という感謝でありましょう。「失明もまた恩寵」でありました。[80]

失明という逆境に屈せず、自己の道を切り拓いていった本間の精神的バックボーンには明らかにキリスト教があった。そしてその人生をキリスト者であったことへの感謝、ひいては「失明」を「恩寵」と捉えているところに、本間の事業精神と思想の真髄を窺えるように思われる。そして本間には日本点字図書館の創立当時に抱いていた「権利において、義務において、晴盲二つの世界があくまでも公平でなければならぬ」[81]という、視覚障害者への福祉、平等思想が根底にあったのである。

【注】

（1）例えば「盲人」という存在を近現代に限定せずに、その時代の社会や文化との関係で把握していくということは重要であるし、日本でもこれまで、中山太郎『日本盲人史』正・続（昭和書房、一九三四・三六）や近世の盲人の実態を詳細に研究した加藤康昭『日本盲人社会史研究』（未来社、一九七四）等がある。また外国でも最近、フランスの歴史家ジナ・ヴェイガン（Zina Weygand）が著わした加納由紀子訳『盲人の歴史―中世から現代まで』（藤原書店、二〇一三）という著作がある。この著作につき、アナール派の巨匠アラン・コルバンは「絶対的他者であった盲人が社会に受け入れられて行くプロセスと、その歴史の緩慢な動きを同時に描くことに成功している。特に、一八〇〇年から一八五〇年までの時期に併存し、複雑な層を形成していた様々な盲人の表象は見事に明らかにされている」（同著、九頁）と高く評価している。

（2）例えば谷合侑「本間一夫と日本点字図書館」『日本点字図書館五十年史』（日本点字図書館、一九九四）、藤野高明「文化の泉 守った人 本間一夫先生との出会い―一読者・人生の後輩として」『視覚障害』一八八（二〇〇三）や坂田容子「本間一夫と日本点字図書館」『図書館文化史研究』二六（二〇〇九）等がある。

（3）ルイ・ブライユについての簡単な紹介は、小西律子「ルイ・ブライユ」室田保夫編『人物でよむ西洋社会福祉のあゆみ』（ミネルヴァ書房、二〇一三）がある。彼の伝記として大河原欽吾『ルイ・ブライユの障害―点字の発明とその普及』（日本ライトハウス、一九七〇）等がある。また前掲書『盲人の歴史―中世から現代まで』の第Ⅴ部（三一三―四一二頁）は「ルイ・ブライユの世紀」であり、近代において点字の流布は画期的な転換を齎したといえる。アラン・コルバンもブライユを「盲人が黙読することと、健常者と書き言葉によって交信することを可能にした人物である」（同著、九頁）と彼の盲人史の文脈の中で高く評価している。

（4）日本点字図書館五十年史編集委員会編『日本点字図書館五十年史』（日本点字図書館、

一九九四）八四頁。

（5）本間の少年時代については、主に「はじめに」に挙げた彼の自伝的著作『指と耳で読む―日本点字図書館と私』（岩波書店、一九八〇）や『点字あればこそ―出会いと感謝と』（善本社、一九九七）等を参考にした。

（6）北海道増毛の国稀酒造株式会社が発行している『国稀かわら版』（二〇〇三年四月一日）によると、本間泰蔵は一八四九年、佐渡の佐和田町で、本間権五郎・ハツの三男として生まれた。生家は本間佐渡守の屋敷に裃を納める仕立て屋であったという。

（7）『指と耳で読む―日本点字図書館と私』四頁。

（8）同右、一四頁。

（9）北海道に於ける盲唖学校は札幌が一八九五年（但し北盲学校）、小樽盲唖学校が　一九〇六年、旭川盲唖学校が二二年、函館訓育院が一八九五年にそれぞれ創設されている。盲唖学校の歴史については中村満紀男・岡典子「日本の初期盲唖学校の類型化に関する基礎的検討―明治初期から一九二三（大正一二）年盲学校及聾唖学校令まで」『東日本国際大学福祉環境学部研究紀要』七（一）、（二〇一一年三月）に詳しい。

（10）函館盲唖院（現函館盲学校）の歴史については、篠崎平和編『北海道函館盲学校　北海道函館聾学校沿革史』（北海道函館盲学校　北海道函館聾学校沿革史、一九六六）、北海道函館盲・聾学校創立百周年記念事業協賛会事業部編『暁　創立百周年記念誌』（一九九五）、『創立百周年記念誌　愛之友』等を参照した。

（11）『函館新聞』（一九三〇年一〇月一九日）。この史料は北海道教育研究会編『北海道教育史』全道編三（北海道教育委員会、一九六三）一二七四頁から引用した。

（12）当時の函館盲唖院につき篠崎平和編『北海道函館盲学校　北海道函館聾学校沿革史』では次のように記されてある。

他方盲部に於ては、この時代は特に雄弁熱の盛んな時期であつて、昭和八年六月十八日函館盲唖院に於て、第一回北海道盲学生雄弁大会が開かれ、それ以後札幌・小樽・旭川と廻つて開催されたのでありますが、いつも優秀な成績を収め、優勝カップを獲得しておつたのであります。函館市内の中等学校雄弁大会・道南学生雄弁大会更に東北北海道盲学生雄弁大会に山形・秋田・八戸等にも出かけて行つて、その都度一等賞・二等賞を獲得、盲部教室内に優勝カップが山のように積まれたものでした。遂に点字毎日新聞社主催の全国盲学生雄弁大会にまで出場して、三等賞を受けた程であります。その当時雄弁で活躍した盲青年は本間一夫・浦田光治・川尻銀治……以下略……（五一頁）。

（13）『指と耳で読む―日本点字図書館と私』二五頁。しかし、佐藤が同志社で学んだというのは、東洋大学（哲学館）の思い違いであろう（清野茂『佐藤在寛』四八頁参照）。これは佐藤が新井奥邃に傾倒し、キリスト教にも造詣が深かったからそのように記憶していたのかもしれない。

（14）佐藤在寛については佐藤在寛先生顕彰会編『佐藤在寛新聞論談集』（佐藤在寛先生顕彰会、一九九五）を主に参照した。佐藤の人物像については清野茂『佐藤在寛』（大空社、一九九八）がわかりやすい。

（15）新井奥邃（一八四六―一九二二）仙台藩士。函館にて沢辺琢磨からニコライを紹介され、キリスト教に接し、ロシア正教に心酔する。一八九九年、米国から帰国後、東京で塾を開く、「有神無我」を唱導し、独特のキリスト教観でもって多くの思想家にも影響を与えた。田中正造も彼から影響を受けた一人である。新井には新井奥邃著作集編纂会編『新井奥邃著作集』全九巻・別巻（春風社、二〇〇〇―二〇〇六年）がある。

（16）『佐藤在寛新聞論談集』（佐藤在寛先生顕彰会、一九九五）、八四三頁。

（17）同右、「在寛・佐藤政治郎先生の人となり」、一四頁。

（18）『指と耳で読む―日本点字図書館と私』二九―三〇頁。

(19)『点字あればこそ―出会いと感謝と』（善本社、一九九七）三三頁。原文は玉田敬次『熊谷鉄太郎』（日本盲人福祉研究会、一九八五）の序文。

(20)『指と耳で読む―日本点字図書館と私』三一頁。

(21)篠崎平和編『北海道函館盲学校　北海道函館聾学校沿革史』において本間は写真入りで次のように記されている。「本間一夫君は北海道増毛の出身で、頭脳明晰にして学業成績抜群、記憶力の優秀なることは未だ嘗つてかかる人を見ざる程で、初等部六ケ年を僅か四ケ年で終了、中等部卒業後昭和十一年三月、関西学院英文科への入学試験を受け、見事パスしたのでありました。点字・仮名文字・英文の三つのタイプライターを持つて勉学し、優秀なる成績を以て卒業、昭和十五年私財を投じて東京に日本点字図書館を開設、館長として現在に至つていますが、昭和二十七年度朝日社会奉仕賞を授与されたのであります」（五一頁）と紹介されている。ちなみに関西学院に残されている資料でも、本間の函館盲唖学校時代の成績はきわめて優秀である。

(22)古沢の著作によれば、「関西学院出のもう一人の先輩である大村善永が卒業後に横浜訓盲院に勤務しているので、西宮に向かう途中、横浜で下車して受験のことを話し、助力を乞うた。大村は訓盲院を今年卒業する下沢仁を関西学院の神学部に進ませるつもりであることも考え、ベイツ院長と岸波文学部長に推薦状を書いてくれた」（『本間一夫　この人、その時代』六七―六八頁）とある。

(23)本間一夫『点字あればこそ―出会いと感謝と』（善本社、一九九七）三五―三六頁。

(24)『指と耳で読む―日本点字図書館と私』三五頁。

(25)当時の『関西学院新聞』第一二一号（一九三六年四月二〇日）に掲載された「文科英文科」入学者名簿には同級生四一人と本間の名前がある。ただし、「函館盲唖院本田一夫」となっているが、これは本間の誤字であろう。

(26)関西学院学院史編纂室所蔵の「学籍簿」による。

(27) 大村善永については、拙稿「大村善永研究ノート―その生涯と事績」『関西学院史紀要』一九号（二〇一三）を参看されたい。
(28) 『指と耳で読む―日本点字図書館と私』三六頁。
(29) 同右、三七頁。
(30) 『点字あればこそ―出会いと感謝と』一六三頁。
(31) 「私の今日は関学から」（『関西学院通信クレセント』二五号、一九八九）。なお引用に登場する亀徳牧師とは亀徳一男牧師を指している。『関西学院教会五十史』（関西学院教会、一九六六）によれば、彼は一九三四年に関西学院礼拝主事兼関西学院教会の第六代牧師に就任している。彼は「博学博識であって雄弁な説教は能く多くの会衆を集めた。神戸女学院の学生も多くなり、礼拝堂は収容出来なくなったので、昭和一一年（一九三六）よりは大学予科（現中等部）礼拝堂を使用するに至った」（三五―三六頁）とある。また彼は毎月一回「家庭集会」を月一、二回、甲東園で伝道集会を開いたとある。本間はこの亀徳牧師からの影響も大きかったと思われる。
(32) 『指と耳で読む―日本点字図書館と私』四二頁。
(33) 下澤仁（一九一七―一九九九）は関西学院卒業後は母校の横浜訓盲院で教鞭をとっていた。戦後、一九五九年から本間の日本点字図書館に勤め、とりわけ「点字教室」において手腕を発揮し、「本間先生の片腕として獅子奮迅の働きをした」（当山啓「点字と信仰と愛に生きた故・下澤仁先生」『視覚障害』一九三号、二〇〇四）。
(34) 中村京太郎については「あるときは点字毎日で、また関西盲婦人ホームで、ときには私の住まいにお迎えしたりして、よくお会いする機会がありました。そのときどきの思い出は尽きませんが、特に中村の素顔に触れて印象に残るのは、関西盲婦人ホームでお会いしたときのように思います。三療で働く若い盲婦人達を前にして聖書やイギリスの話をしたり、みんなに囲まれお茶を飲みながらの談笑のときには、高い気品に包まれた、なんともいえない温かさ、優しさが周り

に漂ったものでした」（『点字あればこそ―出会いと感謝と』三六頁）。一方、鳥居篤次郎については「私が初めて鳥居ご夫妻に出会ったのは、関西学院に入学した年、昭和十一年の夏のことで、場所は神戸の富士ホテルのロビーでした。バハイ教の伝道師アレキサンダー夫人が一緒だったと記憶します。その初対面のときから、私はお二人に強くひきつけられてしまいました。『困難を不可能と考えてはいけない。不自由と不幸とは別だ』などと語って激励されたのです」（前掲書、三九―四〇頁）とそれぞれ関学時代における出会いを回顧している。

（35）武藤誠「点字ノートと私学」（旺文社『蛍雪時代』八月臨時増刊号、一九六七）四八三頁。

（36）この岩橋とヘレン・ケラーの第一回目の来日については、拙稿「岩橋武夫研究覚書―その歩みと業績を中心に」『関西学院大学人権研究』一三号（二〇〇九）を参看されたい。

（37）『大阪朝日新聞』（一九三七年四月二〇日）。

（38）『関西学院新聞』一三二号（一九三七年五月二〇日）ちなみに彼女は「平和の使途」として七月末の三カ月半、一〇〇回近い講演をしたが、岩橋は通訳として同伴した。それは日本各地だけでなく、当時殖民地としてあった朝鮮や「満州」（中国東北部）にまで及んでいる。ちなみに、本間がかって点字を学んだ函館盲唖院もヘレン・ケラーは訪れている。

（39）関西学院学院史編纂室所蔵の学籍簿「関西学院専門部文学部英文学科」による。平均が第一学年九〇点、第二学年八六点、第三学年八七点、総平均が八七点という優秀さである。

（40）斉藤百合と陽光会については、粟津キヨ『光に向って咲け―斉藤百合の生涯』（岩波書店、一九八六）を主に参照した。

（41）『光に向って咲け―斉藤百合の生涯』八八頁。

（42）『指と耳で読む―日本点字図書館と私』四三頁。残念ながらこの書簡は一九四五年五月の戦災で焼失したようである。

（43）同右、四三頁。

(44) 同右、四五頁。
(45) 同右、四六頁。
(46) 『光に向って咲け―斉藤百合の生涯』九〇頁。
(47) 『指と耳で読む―日本点字図書館と私』五三頁。
(48) 同右、五四頁。
(49) 『日本点字図書館五十年史』二八八頁。
(50) 『中外商業新報』（一九四一年六月一三日）。
(51) 後藤静香の略歴については、後藤静香選集刊行会編『後藤静香選集』第一〇巻（善本社、一九七八）収載の「静香年譜」（四三七―五六九頁）を参照した。
(52) 同右、二五二頁。また、後藤は「盲人開発の具体案」として「点字講習会の開催」を挙げ、「さかんに点字講習会を開いてもらいたい。かくして、日本中のすべての盲人に、点字を読み得る力を与え、次に各種の著書を提供したい」（二六〇頁）と彼の主宰する雑誌『希望』に大正時代から点字理解の重要性を訴えていた。
(53) 『後藤静香選集』第一巻（善本社、一九七八）の『付録一』に収載されている本間一夫「点訳奉仕運動の父」という小論。さらに本間は「今日これほど盛んになった点訳奉仕の運動は、多くの意味をもつ。単に点字や声の図書が作られるというだけでなく、盲人の味方、もっともよき理解者を作りふやしてゆくということなのであるが、その最初の提唱者が後藤静香先生だったのである」と述べている。
(54) 加藤善徳は後藤静香選集の編集に携わった人物でもあり、山下信義、田沢義輔、下村湖人からも影響を受けている。加藤が亡くなった時、本間は加藤につき「かけがえのなかった人加藤善徳氏」（『点字あればこそ―出会いと感謝と』所収）という追悼文を書いている。一部を紹介しよう。「それから昭和二十八年までは事業の外部にあって、それ以後は事業の内部に入って大黒柱として日

点を支え、成長させてきたのであります。また私にとっては、文字通り以心伝心、かけがえのない助け手でありました。氏は自身『女房役』に徹することを信条とし、常に私を全面に押し出し、自らは陰へ陰へとまわってその行動は目立たず、きわめて謙虚だったことはだれもが知るところです」（五九頁）、「その他、私の数度の外国旅行はすべて加藤さんに同行してもらいましたし、住まいは同じ図書館の敷地内でしたから、個人的な思い出も語れば尽きません。『加藤善徳なかりせば、日点の今日はなかった』と、私は思うのです」（六一頁）云々と偲んでいる。

(55) 『日本点字図書館五十年史』（日本点字図書館、一九九四）二二二頁。またこの一周年については『図書館創立一周年』という記念誌が刊行された。そこには岩橋武夫、後藤静香、佐藤和興牧師らが執筆している。

(56) 『朝日新聞』夕刊（一九四三年三月九日）。

(57) 吉祥寺教会は、一九三〇年に信濃町教会の伝道所として設立されたことが淵源である。三二年に吉祥寺伝道教会となった。四一年から竹森満佐一牧師が牧していた。竹森満佐一牧師（一九〇七―一九九〇）は日本神学校を卒業した後、白金教会、吉祥寺教会の牧師になっている。

(58) 『指と耳で読む―日本点字図書館と私』七二頁。

(59) 『日本点字図書館五十年史』（日本点字図書館、一九九四）二二六頁。

(60) 『指と耳で読む―日本点字図書館と私』七九頁。

(61) 同右、七八―七九頁。

(62) 同右、八三頁。

(63) 同右、八四頁。

(64) ヘレン・ケラーの岩橋武夫書簡（一九四六年三月一一日）。以下、引用したヘレン・ケラーの書簡は日本ライトハウス所蔵のものであり、訳も同所所蔵になるものである。

(65) ヘレン・ケラーの岩橋武夫書簡（一九四七年六月一四日）。

(66) ヘレン・ケラーの岩橋武夫書簡（一九四七年一一月一日）。
(67) ヘレン・ケラーの岩橋武夫書簡（一九四七年一二月二二日）。
この書簡の冒頭には「It is blessed news to Polly and me that we shall be with you and Keo between the 20th of next Augest and the 30th. How happy we shall be to embrace you both and to see again friends whose kindnesses we treasure up in our memories! And it will be a relief to our aching hearts when we can hold out to blind of Nippon, wrecked on life's rocks, beams of the Great Light by which they may reach the isles of rehabilitation.」と言うように、ヘレン・ケラーの日本の視覚障害者たちへの熱いメッセージが書かれてある。
(68) 日本盲人会連合五十年史編集委員会編『日本盲人会連合五十年史』（日本盲人会連合、一九九八）四六頁。
(69) 同右、四七頁。
(70) 『指と耳で読む―日本点字図書館と私』一〇五頁。
(71) 同右、同頁。
(72) 同右、一一八頁。
(73) 同右、一〇〇頁。
(74) 「母校の最も誇りに思う同窓生」（『点字毎日』、一九九八年四月二日）。
(75) 同右。
(76) この著の「序」は本間の事業を支えた日本点字図書館館長式場隆三郎が書いている。その中で式場は「昨年一年間の自分のやった仕事をふりかえってみて、もっとも嬉しかったのは日本点字図書館の本間さんと加藤さんを欧米に送り出すのに成功したことだと思います」と述べ、当初、本間が参加することを躊躇していたが、式場が中心になり募金を集め予定額（二〇〇万円）の倍が集まったこと。それゆえ、アメリカの会議だけでなく、欧米各地を廻って多くの収穫を得

て帰国できたことを記している。また本間の書簡での一〇回にわたる通信が掲載されている。

(77) 後年であるが本間はブライユ訪問の時を「一九六四年のことですが、私はパリに行った時には、まっ先にクーヴレを訪ねました。ブレイユが生まれ育った小さな石造りの二階家は、記念館として保存されており、部屋にこもるひんやりした空気は百五十年前に通ずる思いがして深く感動し、帰り際に庭の葡萄の葉三枚をもらい受け、押し葉として今も大切に持っております」と回顧している。ブライユの縁の家を訪問したことは、本間にとって感動ものであったと推察される（本間『我が人生「日本点字図書館」』一六〇頁）。

(78) 『朝日新聞』夕刊（一九〇三年九月一日）。

(79) 『関学ジャーナル』一二六号（一九九三年一二月九日）。また本間は他の機会でも関学時代を振り返り、「僕はさっき言いましたように、関西学院によって育てられましたが、関西学院には岩橋先生、熊谷先生というような大先輩がおられ、ちょうど僕の時期には四人の盲人学生がいました。盲人に対する大学の門戸開放という意味では、まさにこの関学が第一号、一番の理解者だったということです。このことははっきり言えます。……略……本当にその意味で僕が関学に入れたということは、本当にありがたいことだと思っています」と語っている（「マイナスをプラスに転じて―日本点字図書館創立者本間一夫館長に聞く」『大学時報』二一〇号、一九九〇年一月）。

(80) 『指と耳で読む―日本点字図書館と私』一九六頁。

(81) 『日本点字図書館五十年史』二八八頁。

※付記

この小論を執筆するにおいて、北海道増毛町旧商家丸一本間家の方々、国稀酒造株式会社の本間櫻氏には本間家の歴史について、北海道函館盲学校教頭の西田正信氏には、函館盲唖学校・佐藤在寛関係の貴重な史料を見せて頂き感謝いたします。そして、日本点字図書館、日本ライトハウスに

もお礼申し上げます。また関西学院学院史編纂室事務長川崎啓一氏はじめ皆様には本間一夫関係の資料閲覧において種々お世話になりました。記して感謝申し上げます。